

牟山紀聞

第三

牟山紀聞

和書門			
二	六	七	八
六	一	三	六
冊	架	函	號

和書			
二	六	七	八
一	函	架	冊

漫筆

内閣文庫			
番號	和	26786	
冊數	6	(	3)
函號	211	227	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



牟山紀聞

茅三

目錄

百人一首

檜の心方

舜水先生碑陰

遠江乃道記

子ぬく月

鳳足硯の銘

子をねる月

大伴と大友

千載集乃序



淺草文庫

文庫

浅がね

後龜山院御製

をねく

雲れ聲

万葉八載撰をね

寛文帝の御製

右大將長親卿

後拾遺集れ序

新續古今の序

水石のれ玉

沙玉集

耳ふさひの歌

あさむら山

黄河

楠公の碑

源氏まゝの歌長歌

古き女の名

ひめろゝの歌

辞世乃ろゝ

反名

牡丹の歌詩

童形れ懐紙

をろ乃ろの尾

自棄れいよりめ

かろろり柳

吊楠公文

氏の愁

市人彌官名

色葉和羅用居の友

柯求ろ歌

家持ハ美男

石外ろろろ

けろろろ

揺れかた

老乃ろろろ

長山氏

惟是ろ歌

白と葉と

形きろろ

西山如賦

年山紀聞 第三

○百人一首

け和歌此事を先達乃説し新古今八花を先として実戦か
 ちしにききたる城定家心のゆゑかたきさるゆゑむし今
 け歌の中ふ実あるをを百そしうて文紙形ふみりかす
 てしうた小倉山莊乃侍子小押さるる城定家のかくれひ
 ち後為家よりありて作名の名後志ししひより
 二條家の骨髄とされりといふとあるに明月記定家をよ
 みていけか不審おくれし先記を抜きて今按を志しし
 嘉禎元年四月今按二條院の年号定家

十二日 甲戌今按今日た定家つ出系しつて源氏乃山莊に到るなりと
 ちゆれも明日記傳等の誤ちをたれなりか考へる

十三日乙亥日出以出賢寂冷泉未_{賢寂冷泉未}賢寂午終金吾相
具少將_ヲ來_ラ暫可在中院_云

今按賢寂冷泉ハ友人の名とみえり何人といふ事いまだ考
へず今吾ハ舊家なり四年冬儀右衛門督より少納言爲成
なりけり人系より源氏末なりなり中院ハ後山も又なり或
人云く賢寂ハ寂道なりと

十九日辛巳金吾來明日可出京_云

今按舊家ハ中院より定家ハの
山莊ハ東山なり

八月

一日癸巳午終自中院頻招請維怖壁耳依難逃京輿入北
土門出逢入道引率三人子弟皆好士_云至坐東庇予金吾
左京彼入道在南面中暫加東面始連飲過半同窮屈
入障子西臥聞之

今日按怖壁耳ハ定家ハの弟ハ先づいハ中院入る身にも
かり子細ありたりなり出門の下出逢の上ハ従父なりハ
あて文素けつめ下ハ後山なりハ入道の事ハ後山なりハ
金吾ハ舊家ハ東山なり又ハ東山なりハ京中暫ハいまだ不考
八月丁酉早旦京輿乘極霞寺_{此間次拜阿弥陀堂}所安云云
退出_{此間も}食訖出宿所出京過左近馬場_{此間も}午時入蓬門

今按この定家ハ源氏と
出て多しゆりたまあり

廿七日己未予本自不知書文字事遂跡中院障子紙形故予
了書由彼入道懇切雖極見苦事懇深筆送之古來人歎
者一首自天智天皇以來及家隆雅經卿

其し中院入道者誰といふ成志ハ其母之字於宮
孫三希頼經女なり頼綱入道して道生といひ此入道
乃其兄爲家ハ城中院大御令と中暫ハ其頼綱ハ婿なり

後中院の地を譲りしつゝをなして為家の居たし
あややとしてしるふ家形は彼入道の熊掌にりて定家
京より筆と歸るまより
（うづう）倉山居りて云ふ 此撰ひ
うと彼入道や維極^{ニテ}又吾事愁^ニ深筆送之古来人歌者一
首とある也やハた深筆のりて定家の撰とみる
乳蓮生法師も歌みて集少と入る人ちハ是はありの
お撰とむもかこころはきて又これ世の百人一首は後
多羽順徳を巻尾に載するは誰ぞも後小次男とあり
たあらはるにや但し當時の長下なりあは及家隆雅經
心とかりしなる乳右の明月記乃文撰とく入るは此百それ
半先達の説うかしくおぼえゆりかの契沖師も

けりもあややなる考よりありかとも此の明月記の文を
さりしあは改観抄百人一乃おむき先達の説とくね
えられも
（以下改観抄） 此百首に入らういふぬもあり入るも
作家のむきとかりねもあるへられハ人のるねあはおされ
る戦後は子息が家やあめりて作家の名をつけて世
にしろめらるるとりけりやあはあの人ともてあを
くくくうはもせけるやとおぼふとあり後拾
遺集に定家や
雅波から身戦はく一あもかひるあみりあまのひはけり
新後拾遺集に雅經や
あは入山より又かり麻乃なかうあやれや秋乃ゆふれ

はるゝ氏ひもつはさるとい詞と同一するを

○檀の北の方

世継物傳く東三条兼家公の家をくく家の女房大補といをきういひて時々たまひをば我檀れ水の方めてたりとあり女とこれけつあふと家とさふれといへへのハ雅とそ侍

○後龜山院御製 新葉集

阿門免てる國乃ひりとりとありやきわ定ていおまけ學ハ古語曰帝王之學^{アラス}匪^ニ藝^ニ匪^ス文^ニ畏^ニ天之威^{アラス}主^{アラス}德^{アラス}為^ニ最^ト後世の大樹幕下匪^ニ藝^ニ匪^ス文^ニ乃^ニ由^ニ學^ニ同^ニとはとありたまひて天々下れ花よりやなとせふふなるふい事なるへとそれふ

次て一五一城の侯伯よりかかそれ次くともわし事な海なり

○明故徵君文恭先生碑陰

安積覺

徵君姓朱氏諱之瑜字魯瞻號舜水明浙江紹興府餘姚縣人曾祖詔誥贈榮祿大夫祖孔孟誥贈光祿大夫考正總督漕運軍門誥贈光祿大夫上柱國妣金氏前封安人誥贈一品夫人有三子香 徵君其季也生於萬曆二十八年穎悟夙成九歲喪父哀毀踰禮及長受業吏部左侍郎朱永祐精研六經特通毛詩少抱經濟之志有識期^{スルニ}呂公輔擢自南京松江府儒學學士舉恩貢生考官吳鍾密

貢劉稱為開國本第一天啓臣降政理廢弛國是日非故絕志於仕進而有高蹈之風崇禎末蒙徵辟不就弘光元年又徵即授重職其薦出於荊國公方國安而大學士馬士英當國徵君不欲累於姦黨故辭不受臺省文章効其偃蹇不奉朝命徵君星夜逃于舟山時清兵渡江天下靡然薙髮變服徵君惡之乃浮于海直來我邦轉抵交趾復還舟山監國魯王駐蹕舟山文武諸臣交薦之豫料其敗上疏固辭凡蒙徵辟始自崇禎前後十二皆力辭焉監國九年魯王特敕徵之徵君適在交趾奉敕歡歎欲往赴之會安南國王檄取流寓識字之人差官應召徵君國王召見逼而使拜徵君長揖不拜君臣大怒將殺之

徵君毫無沮喪辨折彌厲久而感其義烈反相敬重既而欲還舟山謝恩陳情聞其已陷進退失據於是熟察時勢已去不可復振決意稅駕因任長崎實我萬治之二年也流落海外幾十五年數至我邦漂泊交趾暹羅之間艱苦萬狀往而復返蓋志有為而事竟無成也其在長崎貧不能支門人安東守約析俸之半而養之寬文五年我水戶侯梅里公聞其學植德望厚禮而聘徵君慨然赴焉待以賓師禮遇甚隆每引見談論依經守義啓沃備至教授學者屢不倦雖老而疾手不釋卷天和二年四月十七日卒於江戶駒籠之第享年八十有三葬於常陸久慈郡大田鄉瑞龍山下梅里公謚曰文恭先生彰其

○遠江の道記

増基法師の仙よりその中にいそく

夜ふけて床乃なく

言昨山松のことすあふく風乃身にしむ時と床をたたく
新拾遺秋下にみおれみ文字をさる砂やと我をい
はくつきて契仲師のいそく右乃あはる師山ふてよ
ふりへる海山と金てしそに感する所をいふ
砂やとわけてまといゆんさるは高砂乃とあうさ
り古に撰者多しにさうのひる事さる人おほく
たり今按られしかの道乃記をうけあやかりてさ
やとわける本につきて味をなく集さるれむ

なるなりはくく撰の集とてを言成つけてよむ
き事なり

○雲外聲

新後撰集癡

桂中納言師時

あふきとわたりふ人いそく雲の外なる名をいふ
契仲師のいそく是ハ雲の外なる名をいふ
さるり 弟孫好忠家集詞書に石間れあのをわたり
ま柳のいそくはくいれくさるるさるる
いそくといふきなくあふきこのあふきうらにくもれ
あれさるるさるるいそくもれさるるさるる
なハあ

○夜ふりき

今月う後の書くるおと和お不愛といふもの一巻を其
中ふとく内裏より節乞の教を兼てきねかひきねを
けりきねに教をりてけりきねもまた女房に
てあれ教をりてけりきねを種成ひて
されはうりてはらきね系はうりて
和をわりておとけりきね
といふも是も内裏より節乞の教を兼てきねうりて
けりきねもまた女房にけりきねを
てあれ教をりてけりきねを
てあれ教をりてけりきねを

おひりけり老のなまか那

今按ひて事のうりて節乞の教を兼てきね
上き節乞と人とかやのたききねを
る節乞の名教を兼てきね
けりきねかひきねのたききね
けりきねのたききね

○萬葉集ハ教撰ナリ

此事ハ 西山公釋万葉集にうりて
中より考へられてきねの教撰の
家持よりけりきねのたききね
けりきねのたききね

海、集中全同の方おとて四十八首ふ及つり假令
川上のいつとゝ花乃いほむき海をよせし時け先や
此方第九巻と第十巻に出る

此方第九巻と第十巻

此方中と表に深ゆしかりし終のすやるをふ月波子とせ
此方も第九巻と第十巻ふりきりたり
るやの對るり後の撰集にともはく撰名のそくあり
て一集は中くゆてい出る方とあれと只一二首は事
るり舊説のさく万葉とて教撰とて諸兄公以下諸大
文達のさくいふりんとたとい十首おほはき後あり

とも四十八首すとの多きおもはるるなりされはる家持の
年々足同しして書の色くおれていまは清和ふきなり
一なるるなり又古今集雜下に貞觀北河時萬葉集
いひたりりいひたりとて同とあひたりとみてまはる

文屋有季

此方月時雨をりおけるなり此系の名くおとての古くはる
今按万葉集集中終の年号天平寶字より清和天皇
貞觀の始まていひる百ひりあつて小此集の事とてはふ
おとてはるなりて末さはなる有季に教同あつてと思
ふりも教撰なり事とていひるなり法兄公以下奉教の
集るはるかえ舎人親王の日本紀なり並ひはるく顯

此とさんよりそふにそく
はくゆくもさるるれよひもて
代くすれくさるるれよひもて

西山堯一少時彰考鉅總裁栗山源助成信
鼓盪文武於鳳詔と事るる右所製乃と事
哉思るる方乃と事全篇ふとく

嗚乎我

公而至此耶

公之德可以鎮山河山河不能容
公之身於日東

公之氣可以蓋万夫万夫不克回

公之車於蒼穹量包天地骸何不與天地之長才技万類
骨胡為與万類俱亡鼓盪武武於鳳詔仙化奚鞭麟之
遙拾收墜葉於杖桑玉碎奈與霜林飄天將使史策垂成
而廢耶又安知非使文星殆昌倏銷欽忠臣孰使之嗚
呼亂賊誰使之嘲叱又將孰使之師蹈海魯仲連而懷通
信斐文籍乎嗚乎

公惟知其可以益人而不知其未益已惟知其可以據古傳後
而不知其未必同調於里耳惟知慨三良嫉姦搢而不知因循徇
流孱懦忍毀惟知惜名器揭綱常而不知納笑宮闈求媚俗
吏嗚乎世以為智欽所知者義人以為不智欽所不知者利故

正笏幕府内外仗信猶之九鼎陳廟華夷可鎮誰謂重
器無烹粥之進婆娑林丘遐邇傳誦猶之芻蕘出數四
海為頌誰謂瑞物無銜轡之用夷齊逝矣誰不子厥子
而惟倫厥倫文王邈矣誰厥君而厥臣臣以臣西山之爵
公擇而居梅里之馨

公題以碑挑橋烟鎖龍塋雲歸別春會剪梅之詞已矣已
矣臣將何期嗚乎哀哉

栗山成信拜

○子をもつてをみ

續古今集

前大納言基良

あつちねの心れやみ成なるものハみ成思ふ時の涙ちりけり

續千載集

源有長朝臣

志あつちねやみ成思ふ屋みの萩乃鶴も世ふけゆく雲小かくは
子とわらふも萩乃鶴れなねいつても心の周ふくよ
はきて務負おひひりまふあかくゆれと持とやなや
とてしにけりひ乃ち合なるへしきしりのちひるく親
小孝心うきまふ人を禽獸ふひりかたなり

○右大將長親

法名明親
耕雲と号し

契仲昨おしりふりてみちを南胡ふて右大將大納言成経
てよ累代の人かたを小朝の後乃集り明親法師とて裁き
きり心るまに似たり又此れ書きたる仙源抄跋を林家道玄
法師の跡掘小明親ハをねに忌むの歌うちあきて自由小書

及やうにのさうし延政門院のかねを牛けつ乃文
字れりあきありいふ仙源抄跋をくりてるに也親
乃親をいひありてみるに林氏ハ明親の従兄なりと
され親とも必定か乃親の兄とありてぬききねときや
たりともほ也

○大伴と大友

又いふこれち別姓なり大伴と道臣命れあして昔のき
乃乃家ちり淳和帝位よりせめていふ名大伴なるがふ大
の字はけりてたは付といふ大友ハ近江滋賀郡のいふなり大和
物語ハ思ひの事なるふ郡乃住人といふなり長明抄ハ滋賀
明和ハ思ひなりといふと記あり古今集ハ名序にせられハ
ち大友思主とかけり我々思主といふ大伴思主とかける
傳寫れ人ハ源をきくぬ誤なり

○後拾遺集乃序

此序をよめたる通俊ハかきたるふ後撰ハ古今れ
跋をいひて拾遺ふも古今後撰の跋とていふとある
ハ此集とをいふとていふとていふとていふとていふとて
おのりてあり拾遺にきくお集乃序といひていふ事おは
いふとていふとていふとていふとていふとていふとて
は事不審也 又按するに古今後撰の作者れあふ今と
いふハ思主と後撰の増基と別人なる事あり

○千載集乃序

大和みこの歌はらるやあつ非代よりうやうてなれ紫
のきくおふふひほまれり云云此屋まともとのきくひ
新後拾遺乃序ふを何とみこは神言れ山ふも山雪にみ
ゆふなとふれみ真なり万葉のまゝみくさと思せは
是也万葉年十六小妹の神とありて玉言るうてと本歌ふ
序の字とありてう新ふに用いたまはや中とみても屋ま
あゝと云ふと云ふや尊命の字共々みとて判して貴ふつて
教詔の字とみてものまともひふゆさうひて此詞耳ふま也又
喜撰式を教撰のうまれさうハ不審なり 演成式を表
小まねうーあな

○新續古今集序

天なり地さぬありて云々左のおほいさうらき
み源朝臣といふ氏たじくさるはの君乃はくさて
おひさうやまれのうまけまてかりとて成とけり乃内
小然くーさ

今按小柳營ハ周亜又ハ故事より將軍として嘗ハ軍營ふ
て和名よりけりこ判りありけりハの華良公とおけり然し
らさうりて経營の營となんれり
おと契仲
おけり

○常世世國

垂仁紀日本曰時天照大神謨倭姫命曰是神風伊勢國則常世之
浪重浪歸國也 又曰田道間守至自常世國 雄略紀曰水江
浦鳴子到蓬萊山歷觀仙衆

をたへりてをえとてり

あつみ州子乙路乃竹の園生少成

花とせり似れいろをみり

余近歲愛玩牡丹

上皇嘗賜

内園奇品公侯亦名見惠貶當時稱名品絶種者逐也

園裏物清如水藤垂相以嗜好相符賦和歌見贈不勝

感慰漫綴唐詩一絶酬之博噲

斯花今古擅佳名 愛賞不分緇素情

春樹暮雲相澗久 何時得會洛人評

一品公辦法親王

○沙玉集

此集ハ後崇光院後花園帝此院又乃此集なり先年御親筆

をおりしるあれこの江戸少く相いりぬ所方数二々余首を

作りかんかきうらとてみそそと書接ゆり一紙火災にうや

多りたる二首記憶沙玉る所

神露

世氏秋乃おくりし神の露はうり野をの風とてふさりたり

埋火

はえきりるお花は家ふりて起て向ふ埋火乃とと

○童形の懐紙

親長日記曰文明五年七月廿七日内裏和歌清會伏見殿宮

市方無皮童位市懷紙重紙を端きれたる不二童形一云卿

上二かきねる一より後花園院北山時及北沙治了二云一此皮と其

例たるへきより議論より不二終了一後交女房懷紙申治定より

今按伏見文部高親王御童形乃時也

○耳小きり秋

後成卿九十賀屏風春帖に花

有家心

よりまてハ梢なりこれ山さるる所より雪と花の里を

契沖師いそく秋冬面白き氏九十にならんと耳にさり

乃くや用をあらるる事也

○を治れたる尾

新拾遺集に湖上水鳥

小はるハを治れたる尾にうねとわみの山乃臨みなく也

契沖師いそく万葉に心を治れたる尾をふみけと

よめるを治れたる尾に助たる治より治れたる尾に

のこめて心をせん事やいある事

○あさひ山

堀河院中より上総よりあさ

あさひ山よりあさひ山よりあさひ山よりあさひ山より

又あさひ山よりあさひ山よりあさひ山よりあさひ山より

あさひ山よりあさひ山よりあさひ山よりあさひ山より

○自棄乃いもうた

よりたりや人より人より人より人より人より人より

續古今集より紫式部なり吟味より自暴自棄の
戒となりぬなりと云ふ女多き中此式部は娼徒なり
き生質の程此方なりと云ふ日記の趣ありと云ふ
らむなり又源氏物語より云ふ人なりと云ふ
けりなりと云ふ日記より云ふ人なりと云ふ
て凡て用ひて紙綴りたるおもしろくは源氏物語と
しと云ふ日記より云ふ人なりと云ふ
まらゆりなり

○黄河より菊

後葉和歌集序に云く此れより菊なりと云ふ
ハ黄河に云ふ菊なりと云ふ菊ハ黄菊なり

と云ふ後葉用ひたり此序ハ長門守後京極入道寂超の菊なり紫
徳近衛の菊なりと云ふ大京三寂の菊なりと云ふ
章郷也 云々の文なりは云々の文なりと云ふ
又云々と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

按云に右の序ハ一本に云く此の文は云々の文なりと云ふ
と云ふ又云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふ又云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
たりと云ふ今ハ伏見文貞致親王の御本ハ依違

○かきゆり柳 契沖と云ふなり

拾遺集より云ふ柳と云ふ

仲文

河柳といはれり。その名の氏にあらけの衣をまら年
うつ不物沈菊の宴。なふれをく。わう柳ふいりたむ
て大ま

あや。わい。あまの衣を。ねりて。緑乃系。成。ふ。ふ。柳
契仲翁のい。み。を。は。く。ま。た。る。所。と。み。を。つ。く。と。名。付
る。と。わ。う。柳。あ。る。所。と。や。う。名。付。あ。る。な。る。へ。あ。せ。堅。ふ
わ。う。け。き。ま。れ。例。う。ハ。冠。の。なり。に。ま。た。る。柳。の。ま。る。あ。や

○建碑予正成

元禄五年の秋。ふて。せ。ゆ。り。し。楠。正。成。ハ。忠。義。始。終。を。み。て。あ
て。王。事。に。死。し。る。人。を。つ。墓。表。乃。あ。る。は。る。氏
西山公。移。ん。た。此。事。を。わ。り。て。依。く。み。を。宗。淳。と。稱。呼。必。清

川。ふ。つ。つ。し。碑。と。な。て。田。地。と。その。を。ま。に。り。て。廣。嚴。寺。に。寄
附。き。れ。永。冥。福。と。修。し。ゆ。る。へ。き。よ。し。令。し。ま。ひ。ぬ。る。此。碑。面。の。ハ
字。ハ。う。と。此。所。に。ゆ。み。つ。る。名。氏。傳。て。は。う。い。ふ。れ。る。と

嗚呼忠臣楠子之墓

碑陰。ふ。と。あ。る。舞。あ。先生。此。か。れ。正。成。畫。像。の。讃。辞。を
刻。し。れ。り

忠孝著乎天下。日月麗乎天地。無日月。則晦蒙否塞。
人心廢。忠孝。則亂賊相尋。乾坤及覆。余聞楠公。偉正成
者。忠勇節烈。國士無雙。菟其。外。事。不可。察。見。大抵

公之用兵審強弱之勢於幾先決成敗之機於呼吸知人
善任體士推誠是以謀無不中而戰無不克誓心天地金石
不渝不為利回不為害怵故能興復王室還於舊都諺曰前
門拒狼後門進虎廟謨不臧元兇接踵搆殺國儲傾移鍾
簒功垂成而震主策雖善而弗庸自古未有元師如前
庸臣專斷而大將能立功於外者卒之以身許國之死靡
他觀其臨終訓子從容就義託孤寄命言不及私自非精
忠貫日能如是整而暇乎父子兄弟世篤忠貞節孝萃於
一門盛矣哉至今王公大人以及里巷之士交口而誦說之不衰
其必有大過人者惜乎載筆之者多所考信不能發揚其
盛美大德耳

右故河攝泉三州守贈正三位近衛中將楠公賢明徵士
舜水朱之瑜字魯瑱之所撰勒代碑文以垂不朽
後の二行ハ西山公此碑等より出ルハ西山公
豊一と云い一と云い此館に於て裁中村顧言ハ字新奉倬
乃詩十首の中に其四
立言皆大義 修史最精明
特筆壬申亂 雄論南北爭
北雞難繼統 姦猾不逃情
異代酬知己 建碑弔正成

○予楠公文

今井弘濟

浩漢平沙之渚遠含終路以望洋亂峯鬱紆之境橫控播州而為疆人煙扶疎平丘岡雲樹上下於斜陽蓋以三海之勝界宜乎兵庫之為名仄聞楠公死節於斯湊河即其古戰場也特詣墓塋敬弔魂靈嗚呼哀哉寒威凜冽之歲惟有松柏而凌霜國家喪亂之秋特降副心而示負昔者元弘之際王道凌遲武臣放橫帝怒怒旅大憝伏刑當斯之時髦彥如雲英俊似星裂土分茅功銘旗常天下初定人仰治平何意皇綱解禍復起于蕭牆女謁行兮藤房去謗說進兮護良死於是足利叛亂赤松騰起州郡烏合英雄虎視向之所謂壯健將變成恃勇脅主之子循吏文人翻為賣降忍后之士斯時也負烈慷慨整暇從容始則

奮佐命之威終則全殺身之義畧埒樂毅而有餘忠此諸葛為匹者唯有楠公而已公嘗遇風雲之會得挺龍鳳之姿夢兆有類乎傳巖猷謀不恥於下邳深抱盡瘁之志遂舉勤王之師沉毅難察攻守奇策維測正奇轉化因敵剛柔隨宜巧盡守備墨翟之所以全孤城能用小技田文之所以養鷄鳴及其朝廷失鹿元師敗外公之良策不用嘉謀無取既受節度于人進退不由乎己卒練而法嚴雖曰節制之兵將能而君御遂成羈縻之軍於是公回天之力無施貫日之忠弥純驚擊電掃烈氣干雲喋血創沙名朱殷遂決必死之心忽殞不賢之身嗚呼噫嘻死或重于泰山或輕鴻毛公之云亡謂之人乎謂之天乎然而數百歲之下聞公之義者懦夫立頑夫廉

老者壯窮者堅是大有禪于風化也一杯孤墳萬代功名
梅之先春之公德惟芳松之後凋兮公節惟貞對墓樹而
懷古望山河而悲傷墓上有松二株

今井弘源字八小戸乃產寧水先生其子彰考
鉅小侍り先年西國へ往りて其時湊川の廣嚴寺へ
参りしより碑を傳て奉りし文なり

○源氏目錄乃長安

逍遙院内府 實隆公

源氏れとて 屋内しきは しかるき
まうはふと ともくくとし けくき
まうねふとく うはきまや 屋より道乃

夕かほき かのむはまの いはふと
あふふとて 花乃かき けきと
紅ふ乃賀 かきはふと 花乃えき
むきかき おふとて けふの枝ふ
おふとて おふとて けふの枝ふ
すふのうみふ 志のうに 志のうに
あふとて きのうの みをは
志けき蓮生 秋ものふ人 あふせに
かふとて 志のうに ねとて
屋よりふとて まうの みのうと
うはふとて せふあふの うのふ

ゆうり思ひし	をせみん子	かけつ志は
玉か河原	らうたままの	も川祢乃い
ひもる花よ	まよこまふ	あきかゝる乃
ねもいさう	それたうき	ささる川や
やうな涼き	かゝり火を	けさの風よ
もふはふい	ひうらゐぬ	ともきうち
むも屋つゝ	友をのま	満まのうら
とまけしを	折る梅をえ	おほふやや
さけふしを	うらまふれ	るふくは
わつれきも	そりれか	なられま
よゝゝのねい	おゝし海や	海よのま

し急ぎうき	うらまきり	秋もか
ふれはさり	ひきのりま	まを海の家
ふもをなく	くもかた	秋半乃月
きく名もに	ひやふき	うらま紅梅
あふか	志あふ	さけ川や
やうら川の	うらひ光乃	乃をまて
志あう	とにひ	あまはさ
さのね	はうら	ゆれあ
全より本や	屋より	あけ
乃られ	舟中	契りあ
かき	ねの	ふな

とてとゆへに 夢れうまはし

○民れ愁

後系極抄改

おほくふく神うなぐれ世乃中にもくき民れさむと云

春宮太史降筆

かへく世の民の然るもの記ゆふ家法はくてもさへひて

一雙れ好方合たり此を以て君臣輔佐の徳を

周といふも恥辱なりと云はれやしておろきをば

ふ人臣を此お公の寵人といふなり

○婦さき女名

侍勢、奇文案、頭藤系相通といひ、まけ、素浅友系乃

小忌古曾と云けるより小右記よりありあ戸城下吉田社

の文書けうらに字男と云女の名あり假名はらとをいふ

まう今の世ふてはかうた名なるなり

○市人称官名

本朝より末の世ふと治工筆工のたへひまても官名を稱

する事ふるなりぬもろくも同一事をかり陸容菽園雜記曰

吏人稱外郎、若古有中郎外郎皆基省官故僭擬以尊之

今人称郎中、銀工称待詔、磨工稱博士、師巫称太保、茶酒称院

使皆然此州率名分不明之旧習也國初有禁

○飛免なりめ

資益五日記明應十年正月一日云諸社之遙拜之後三献

有之次看經次持コワ次比目始 海人藻芥 中寺門宣方子惠命院僧心

宣守 曰公家侍膳飯若強飯也執柄家小如此如飯金分畧

飯也但人々依好惡用之強飯時飯湯也而近代姫飯時ヲモエ

テイラセヨト召不叶理者也

按和名集^{ニヒ}糲^ソ 和名比々或説云 といひて今次別^{ニヒ}粥^ソと出

して和名之雷加由^カ薄^ハ縻^ミ也といへ糲糲ハひひと此糲

小^コ而^ニ以^テ縻^ミ之^ヲけりといひ一年始^ニ糲糲を喰^クといひ

は事なり

○色系和雜 閑居法友

契沖昨^ノりの文小^コつとく和雜集^{ニヒ}中^ニ法考^ノの舊^ニ氏將軍

以來天台宗僧撰と云く^ル然^レ不^レ慈法和^ニ高^ニ他^ニありひハ

顯昭の作と云ひ^テ其^ノあ^リあ^リ人の多^クなり^ト其^ノは^レ云^フは^レ拙^キ拙^キ拙^キ拙^キ

少^シなる閑居の友と云く^ル慈法乃^ハ他^ノもの^ニ拙^キ拙^キ拙^キ拙^キ拙^キ拙^キ

入室の事^ノも有^ル松尾陀月^ノ庵^ノ茶政^ノと人^ノ作^ノと云^フは^レ此^ノ僧^ノ家^ノ隆

い^ニ乃^ハ錢^ノ別^ノ方^ノありて入室^ノ被^レされ又^ニ明^ノ惠^ノと人^ノと得意^ノと云^フは^レ

明^ノ惠^ノ傳^ノふも^ニ未^ニ集^ノふ^ニは^レ依^テ僧^ノ道^ノ心^ノ者^ノと云^フは^レ昔^ノ哺^ノ子

も^ニ強^クし^テも^ニか^レん^ニは^レま^ニつ^テは^レ松^ノ出^ノと^ニ有^ル也^ノも^ニ閑^ノ居^ノ友^ノより^ニ出

ず^ル又^ニ尸^ノの悦^ノ目^ノ抄^ノ序^ノふ^ニ万^ノ系^ノの^ニと^ニ系^ノた^レん^ニは^レて^ニち^ニる^ニ其^ノ終^ノて

多^クなる^ニと^ニ云^フは^レ是^ノハ^レ古^ノ今^ノに^ニあり^ニ也^ノ存^ノく^ニ如^ク万^ノ系^ノ集^ノハ^ニ満^ニく

そ^ノも^ニ有^ルん^ニま^ニら^ニか^ニ又^ニ事^ノのお^ノり^ニ可^ク也^ノう^ノ如^クと^ニ存^ノい

○穉世

鳥丸亜相 資慶卿

さふふりみずは夢よりやせぬ就田のふきこりしは書

松平大和守 直矩朝臣

限りあはれは苦ふむるなり流るるわ代し乃月花
今按太わも殿の秋とてれはりやふみうは雪ふたら
をふたさうえとがうへ代しをおりやりをるゑの花
ハ咲まふとて感懐わくや作らう一此朝臣は元禄八年
亥四月十六日卒を五十二歳号天祐院藏船道駕居士

○松若柯求翁考

松若堂と号し江戸に於て歿すのちたう人也
元禄三年に七十歳卒

七十ふなりけりま

けさふれはりて知やふしもまれなるはすはひて

春月出

ふふ花のあはれとあふてはるる月ハ夜の方よりれか

古の春月

黒ハりてふふかきる光乃はるる難波のま乃夜月

風静花葉

梢さうとわねむ乃はる風ハ花をりくふふはさふて

神無月はる甲斐ふにふかり一武蔵のうて

麻のなく浅ゆて

いさふや秋より後をかせのる葉れふさうなく也

詩意惠

宵れきのふふ人ふふふてかふは枕乃夢そみしつに

信濃より住まふ娘の身まかりし所

心のかよひしきそのかき梅となしてゆきえぬ世となるじ

みかきとれゆりたる

○及名

公卿補任之大伴宿祢旅人 天平二年十月初任
大御言政名洗等

今按名をあらたけしとある、信より旅人と洗等

とも多比等ともかき、是をるハ史を不比等とかき馬飼

と字合ウニカヒなりしとある、カヘレ及名なり此及名の事

その比をりしとある、西万葉集五天平元年十月七日

小大伴洗等謹状とあり 二年元年の字そのうへ續日本

紀聖武紀小旅人豊といひ、ハ始終ありしとある、ハね

米のりかき及名とある、ハね人の所なるなり

又安積ヤシ覺サトシ字、ハ覺とあり、又の次と中古にも紀長谷雄

を發昭とあり、三善清和と居述と出りしとある

○家持ハ美男

業平の容貌うはるかりし、ハ世ふしひゆするハ、ハ伴勢物語

をよむ人ありきゆゑなり、ハ家持乃ちハ万葉集の

はくより流布なり、ハ也、ハ小人志し、ハ万葉集十七卷

平郡フナ氏ヲトメ女郎ヲトメ、ハ方十二首の序、ハ家持ハ風流の美男なりを

ふりや、ハ方三小笠カサヲトメ女郎ヲトメ、ハ託馬野の業ありきなりしとあり

より、ハ弟ハをよむ、ハ今古の女郎にいらしきとあり、ハ乃

女の心ねしとあり

○隠士石外

石外わう記やと長野衆女と名けりて志田伴多守信
幸ねふはつり 劔術に諸流を極めまがなり大う
能くよく作し 神を家ふあらしめて道にたすみ禪
教の学ふ深く 奇林ふはへあしめてより後方おどく作し
うみまわるとしき 幽く記憶きとて 東嶺隠所乃唱へ
られ侍し

人の家より庭のはくら城

みうし 跡を模れおふ衆も形 花をばりて山となりえん
一本を静少はとて 咲けりえんをよりんら流るの
隠遁に後ハ右と号しける 正徳三年より二十年

よりあけり 東海名の沼津まで 舟よりい七十二歳より
育るもより 隠遁の志あり 美ふはもとよりけりて

○吉川惟足

神緒山にあけりけりて 正直れ教とひらく 江戸ふひ流る
はひふそ終るをめて 大樹へふれ 家伝起きし人なり 吾を
もふみゆりては

系いふたのおろしき けりて 神と神と けりて 夢ときけ
世に流る人乃よふも かなきとて けりて 流の神乃終る

○さくさく

よせ 浦風やまはな きたる 志望の流松
契仲師らる 浦風のわ けりて 波なりいふと

聖教不誨

○ ぼろよとふちき

玉榮集

玉葉集
ふりきりて春の標乃花のしらけをさへみえて少くも春風

又つゝ小舟よとち笑ひておねをりたふは春風とて
たふしく梅も香ひやとて皆たふむしらとてあや

○ 擧乃本父

玉象集

けさより、立田の掬えりふ、夕日や花の時をたづねん

又多くあれは、様仕な久保と可遊たる者なりぬるを
ゆゑに此後御とまはるかやにあらなり

月
あ
旅
り

玉泉山集後二位仍家

高きやせん歟と詠くも逢坂の多し昔より六月もよく逢

え、國のまはり城を建てよ、あせけるふや

○あまなと

壬生忠見集の傍稿といふたにうゝあるうぢぢぢぢぢぢぢ
喜ぶきうぶちまこいふはなるいふはなるいふはなる
此をこれとわきのうにふりあり

○老妪

元禄六年二月の終りて仰し西山より漆村の寺別荘へ渡
ら勞むしたる折しと庭おの梅さかりなりとれハ白井
民部伴胤はふしうとて子代ふるき君の園に梅うゑ乃
ちうふと恵成のうきてとてゑるとや仰しにせうきし以返し

西山公

子代も人さき若枝乃梅の花乃香哉をひきふうと伝老忠覺
ふ時何そはき短尺哉此後わたりしうけを拜めんて懐
旧あさかゝねまて半うけなり

○西山社賦序

藤原為章

万葉集不布勢海城立山賊二上山賊と云々あるが今
 づり清輔朝臣要義抄乃席にも此奇をとりてこれ
 御よりとて人ら造りて其のまゝこれ賊少は古傑
 律文のこれとてあつていふやうな方ハ性情と云うにて
 と系づりて大義を建ててとてとやうな形世ハ満ちた古
 賦の山き神といふなり今や為章か乃文賦かなよて

中々此愛體を製しきつて、矢をとり文ありあ
 中々此愛體なるものなり、お中篇の長歌に
 て後半篇の文と、文と長歌と、いふ言をいふの
 あり、性情す、幸して文章さうなふなり、
 志すとも、好まぬ、お中篇の、お中篇の、
 中々此愛體なるものなり、お中篇の、
 中々此愛體なるものなり、お中篇の、

出遊元禄四入りの杖名ありて正月乃夜お章宴ふは
 ん多うてあははあをねんやまあをふておうは
 によりかやほくくふはふてあはははあをねんやま
 ーおかうくふはふて西山のいさきまはあをねんやま
 松ふうくくあつううあ世の人あははあをねんやま

とたよりなくをまみりて露おちて桂をまみるはまの
風ぬくまのちられきわねのまわふりやまにきるとあや
ちみえれは久あそ乃婦嫁れうそいふはうふ水消のま
はぬまの鳳の冠といふは瓊紋の履といふはあのみら
まれまのて光彩あそいふはあやうま章紙むくてい
く中細々の天とてうにあらひの佳會をりよりて送初
雄篇の廣寒のふやわひをまゝ蟾精の花よりみくや
いふは人間富貴のまらひ天と乃まねととよ路はし
然るがまに今宵なんそりて山あれきよあれそわら
きうまてまじかあともうたふの文りはあふそ
みくうはまのひとねとま復すれそま今いじへあま

ふ佐竹の氏れせくるもあそてかたけ不老澤とみま
藤の時あれそあそかろあそいふ山とうけとよ路
ういのまあそはくふ久そ乃あ細川の奥はくといふて
本田の市のおれいひも増井の寺はあそかしひふうそ
瑞就乃たふねい君うかそ乃の清靈のむうりかきりなくも
あひのじまこれけつそをうゆりてそまあそあそあ
あまといはくくらあふひまて岩水さみう乃のふあへ
まねのうらふらかあふまのそまね板花けくあそあ
かき紫乃門うていふふなそくはひては清代のまら
あそあそあのおうりあそあそあそあそあそあそあ
そくあそあそあそあそあそあそあそあそあそあ

助綱常ハ家婢乃新生なり一瓜屋にてみゆからのふく
その婢をゆくつこりて徳村の某と嫁ぢりぬ徳常は愛
育する事より新生れこゝるハ母子の情いさかもた
けりといひぬ徳常もよき者なりといふくもつかり
家婢乃ち死るといふ事十回入りていさぬけりゆり
おはるかり一疋病をうけたり一に育子醫業をな
あけむりあゆり人々はけみきあふゆきし神楽寺の
親世音菩薩へまへてまねし祈るる感應衆と
ころむりいふて其の屋まひりきりあれ世の中は苦母
母乃ちいふ一死をなりゆりてん文ハ家婢とていひて徳治
先きせられ婢城とすこゝをいふにきりへみらるる
哉徳治何れとてよく女職ありてたり古人のいふくおよそ婦

人のむかし世つれぬをきりといふ一娘なれり百拙を掩ふ
るいふて嗚呼育子や如ういふけしハ世の中は妻女のをへ
なりゆりまゝいふ網治久しき石はけりきる若侍は不
あゝ育子に心とかけけはあゝふひなひとんと留りて
時徳治他よりきりぬきにそれゆふ志のひり一死兼て国を
やゝなりきんか縁をけりきりていふいふ切きれた
そりといふあそかりふて死よけりかゝつて乃ち家裏う
かきてけりまなくも一網治帰るにたふに死てあゝ
のねりむきけりめをり死ゆりけりといふおよそ女の家ま
はる事かゝれてもいふいふもたあゝいふいふ身一生

此恥のしきしれねやろふあたまをけりし事ある
ふけ宵子ねいさねもまゝ流りしに鑑治も城をもつてそ
と家のうられさる記もなまふるまひを満したちもく
なくそゆりしと婦徳を思ふよき流りし書小賢女節
婦烈女なまゝとくしを志海なるふちいや満りてそお
ほとゆりし正徳二年まゝろ病はふて同一お七月廿四日卒
去年四十二歳江戸駒込乃大森もとよみろり妙珠院
月沈日冷とれり名をり満りてそ一むろくあや
そなま貞烈乃婦人なまろけり志海も

